

「五輪」の名付け親を紹介

7月16日から杉並区役所1階ロビーでは、オリンピックを「五輪」と名付けた川本信正(1907～1996)さんを紹介する企画展を開催しています。「五輪」という言葉が初めて登場したのは川本さんが記事で報じた1936年7月25日の読売新聞夕刊で、まさに1940年に東京でのオリンピック開催が決定する直前でした。

この「五輪」という二文字は、いまだに色褪せず親しまれて続けています。こうした歴史をはじめ、川本さんの遺族が引き継いできた1964年の東京五輪に関連する資料を展示しています。展示は、7月26日までです。

近代オリンピックは、1896年にギリシャ・アテネで第1回大会が開催され、この時から世界五大陸の団結を表す五色のオリンピックシンボルが使用されてきました。1936年、4年後の1940年(昭和15年)に夏季オリンピックの東京開催が決定する直前、当時、読売新聞の運動部記者だった川本信正さんは、オリンピックを「五輪」という言葉を用いて報じました。

この「五輪」という言葉には、「五つの大陸」ということだけではなく、宮本武蔵の五輪書で示されている「仏教の万物を構成する「地・水・火・風・空」が揃う世界の最高の舞台」との意が込められています。1940年の東京五輪は、支那事変の影響などから、政府が開催を返上することとなりました。しかし、「五輪」という言葉は日本に定着し、誰もがオリンピックと理解するものとなりました。

一方、その名付け親の名を知る人は多くはないでしょう。杉並区が、川本信正さんの存在を知ったのも偶然です。今年4月、東京高円寺阿波おどりの台湾公演があり、その代表団に川本さんの甥にあたる笠井清司(61歳)さんがいました。笠井さんは、「東京新のんき連」の連長を務める方で、区の担当者との連絡役でもありました。そうした偶然の出会いから、信正さんを紹介する展示会の話が持ち上がり、笠井さんからは、信正さんの計らいで笠井さんの父親が観戦した陸上競技のチケットや、1964年当時の記念切手を、また、笠井さんの従兄弟にあたり、信正さんの長男である川本峰男(63歳)さんからは、父親から受け継いだ「1964年東京五輪の公式報告書」をお借りすることができました。



初日の16日には、笠井さんと川本さんが会場に現れ、1964年当時の資料を見ながら、なつかしい思い出話を楽しんでいました。川本信正さんは、「五輪」の前にも1932年のロス五輪に出場した短距離ランナーの吉岡隆徳を「暁の超特急」と名付けたことでも知られます。長男の峰男さんは、「父の存在を知ってもらうことで、1年後に迫った東京五輪への気運が盛り上がることにつながればうれしいです。」と笑顔で話していました。展示は、7月26日までで入場は無料です。

【問い合わせ先】

オリパラ連携推進担当 TEL 03-3312-2111 (内線) 3792